

## 中部ブロック記念講演

9月19日 ホテルキャッスルプラザ

# オフィス・環境づくり最前線

## ～中部地区の先進事例～

恒川和久 コーディネーター：名古屋大学工学部社会環境工学科 講師

河合利夫 パネラー：トヨタ車体株式会社 専務取締役

松島 健 パネラー：松島建築設計事務所 主宰(株式会社 鈴木設備事務所設計担当)

中山雅仁 パネラー：三重県総務局資産運用特命担当監



恒川 例年と趣を変え、中部ブロックで今年度ニューオフィス賞を受賞した3社の方に協力いただき、受賞オフィスの紹介と、パネル・ディスカッションという形式で進めていきたい。

### 弱さを受け入れるオフィスを

恒川 オフィスをつくるうえでコンセプトは重要である。その一方で、もう一つ、忘れてはいけないものがある。それは「人に対する優しさ」「働きやすさ」という視点ではないだろうか。

この2つの視点をさらに進めると、「弱さ」というものに突き当たるのだが、この場合の弱さとは、必ずしも体の弱い人を指しているわけではない。オフィスにはいろいろな人がいる、その一人一人を丹念に見ていかなければいけない、という意味である。ずっと見ていくことが、オフィスを新しくつくる、あるいは持続的にいい環境をつくっていくことにつながるのではないだろうか。

昨今の経済状況の中、オフィスコストの削減は重要な目的だが、同時に、忘れかけているオフィスの品質そのものについても、もう一度考えてもらいたい。

では、3社の方とのパネル・ディスカッションに移るが、2つほど質問を用意してある。

1つめは、人に優しいという観点から、ワーカーが生き生きと働ける環境として特に配慮した点を各社の方に聞いてみたい。

河合 私どものオフィスはワンフロアなので、それぞれの部署のザワザワした感じが伝わって来て、みんなが働

いているという実感があるし、ほかの人間がどういう仕事をしているか、よく分かる。ワンフロア環境は、部署ごとに部屋があった従来に比べ、個人個人のプレッシャーがかなり軽減したと感じている。

松島 (鈴木設備事務所のニューオフィスは)住宅に似たテイストを持っているが、それは意図してやったこと。家庭と職場の線引き、あるいは両者の対立構造を崩していく、そういう狙いがあった。会社においても家の一部にいるような感覚、そういうような雰囲気をつくっていくことが大切なのではないかと考えた。建物は芝居で言えば舞台みたいなものだから、働く人が生き生きとしているかどうかは、たとえば脚本であったり、演出であったり、そういう力が大きいのではないかと。

中山 三重県庁の場合、オープンなオフィスにしたことで環境としては大変よくなり、ダイアログ、つまり対話が非常に弾むようになった。

一人一台というパソコン環境を考え、リフレッシュルームをどうつくるかにも配慮した。健康器具があって、BGMを聞きながらゆっくりできる。そういう場づくりに加え、人事とも相談のうえ、就業中に10分とか15分ぐらゐの時間をとってリフレッシュできるようにした。適度な休息はかえってクリエイティブな仕事を生むし、仕事もはかどると考えた。ただ、利用状況はというと、まだまだの感がある。もっと有効に利用され、クリエイティブな仕事につながればと考えている。

### どこに生産性の向上を感じるか

恒川 2番目の質問は、新しいオフィスの生産性向上をどういう部分で実際に感じているかをお聞きしたい。

河合 直接的な答えになっていないかもしれないが、クルマの開発はかなり長い時間の中で、さまざまな作業が同時に進行していく。何万点もの部品が関連するので、どういう風に進んでいるのか自分なりに実感することが求められるし、一方で、全体を見る人が進行状況を把握できないといけない。

その点で言うと、ワンフロア環境になって、ほかの人の意見を聞ける機会も増え、物理的に開発プロセスを把握できるようになったのではないかと感じている。

松島 具体的な部分は分からないが、メンタル面で言えば、社員の表情が明るくなった。電話を取る声が全然違う。

中山 三重県庁は行政改革ということでのいろいろな取り組みを行なっている。

その中の基本的な柱、ニューパブリックマネジメントでは、県民に対して、この計画は何年度までできるという数値を示し、それを検証していくシステムをとっている。この行政経営品質の手法の中で、権限と責任を明確化する意味でマネジャー制を取り入れ、それに応じて組織も変えた。このキーポイントは、先ほども述べたが、部局を超えたクロスファンクショナルの対話である。そういうダイアログ文化が、オフィスの近くにある打ち合わせコーナーの8割という高稼働率が示しているように、確実に芽生えは始めている。